

山田みやこの活動報告

令和4年3月11日(金)

「誰も孤立させない社会をつくる」講演会に参加(オンライン)

主催 栃木県子ども・若者地域支援ネットワーク

講師 奥田 知志氏(NPO法人抱撲 理事長・)東八幡キリスト教会牧師

奥田氏はまず最初にキリスト教思想家・文学者でもある内村鑑三氏を紹介。

「国民の精神が失せた時に国が滅びる」

自分だけ良ければ良い、相手を否定

→ロシアのウクライナ侵略にもつながる

マララ・ユスフザイさん(パキスタン出身の女性でタリバンによる恐怖政治や女性の権利を奪う圧政を批判し、教育の重要性や平和の大切さを世界中に向けて訴え、2014年ノーベル平和賞を受賞)を例にたとえ、自分が第一という“自分病”を否定した。

人間の脳は自分のことだけ考えることは一人分の脳しか使わない。多くの人と会い想いを分かち合えばその人数分の脳を使うことになる。

自分病→コロナ禍→自分だけでは立ち行かない(魂のキズとなる)。対人間援助により、みんなで生き残ることが平和の道になる。そこで困窮者支援を行う意味は「①貧しさ、さびしさ」の解決型支援、「②つながり続ける」ことを目指す伴走型支援。

社会的孤立の調査(2014年)OECD諸国の比較によると家族以外の人と交流のない人の割合ではアメリカ0.1%、イギリス5%、そしてなんと日本は15.3%となった。

2018年1月イギリスは「孤独問題担当大臣」新設

国家損失年間4.9兆円(320億ポンド)

孤独の健康被害→肥満、1日に15本喫煙するよりも有害

○孤立と孤独の違い

孤立→家族やコミュニティとはほとんど接触がない客観的な状態

孤独→仲間づきあいの欠如、喪失による好ましからざる感情(主観)

○ホームレス支援から見た2つの困窮

経済的困窮=ハウスレス

社会的困窮=ホームレス ※ハウスとホームは違う

ホームレス中学生

家があっても帰るところがない

誰からも心配されていない

社会的孤立が経済的困窮を招く

縁の切れ目が金の切れ目に

○伴走型支援の効果→物語の創造

物(現金・現物)を物語に変える→他者の存在

物に人が関わることで「物」が「物語」となる

社会保障とは「現金給付」「現物給付」が中心

〈ある母子家庭のケース〉

何を食べたいかは覚えていないが、誰と食べたかは忘れない

※伴走型支援は物を物語に変える支援、自立支援である。

講演会&研修会

誰も孤立させない社会をつくる

参加費 無料

「家族・企業・地域」の支え合いによって成り立っていた日本の社会・文化が変化し、経済的に困難する人や社会から孤立する人が増えています。これらの問題を解決するためには、支え合う仕組みをどう構築し、何を軸に考えれば良いのかNPO法人抱撲(ぼつぽく)代表 奥田さんのお話を聞きながら考えます。

日本社会の変化による課題

- 家庭の分離
- 企業に親
- 地元のつながり
- 格差の拡大
- 非正規雇用の増加
- 自立支援の推進

日時 2022.3.11(金)

第1部 講演会 13:00~14:30 第2部 研修会 14:45~16:00

内容: 北九州を拠点に「ひとりじゃない」という支援を行っているNPO法人抱撲 奥田さんの講演 支援者の悩みや課題を語る「これらについて考えます」対談・質疑・孤立支援に関わるスタッフ・ボランティア

会場 とちぎ青少年センター
栃木県宇都宮市駒生1-1-6 コンセール階
会場: 50名程度(満席)・またはオンライン参加
※新型コロナウイルスの感染拡大状況によっては、オンラインのみでの開催になる可能性があります

お申込 左記のQRコードを読み取り、フォームよりお申込ください。メールの届きは下記のアドレス宛にお申込ください。
tsunagaru@tochigi-ysc.org

1人の子どもをみんなで支える

講師 奥田 知志さん NPO法人抱撲 理事長 東八幡キリスト教会 牧師

1963年生まれ。1990年、東八幡キリスト教会牧師として赴任。同時に、学生時代に始めた「ホームレス支援」に北九州でも参加。事務局長を経て、北九州ホームレス支援機構(現 抱撲)の理事長に就任。これまでに3500人(2020年3月現在)以上のホームレスの人々の自立を支援。
著書:「逃げおくれた伴走者」(本の雑誌出版)、「助けて」と言える即へ! (内木隆一郎氏共著・集英社新書)、「生活困窮者への伴走型支援」(朝倉書店) 他多数。
出演:NHKドキュメンタリー番組「プロフェッショナル仕事の流儀」

とちぎ子ども・若者・支援ネットワーク
運営 一般社団法人 栃木県若者支援機構 / 栃木県宇都宮市昭和2-7-5 / TEL 028-678-4745 FAX 028-678-4746